

イングラム「タイの米価問題」

田 坂 敏 雄

訳者まえがき

(一) これは、James C. Ingram, *Economic Change in Thailand 1850-1970*, (Stanford, California, 1971), Chap. 11, "Economic Change Since 1950: I" のなかの一節 "The Rice Premium" の全訳である。本書は、初版が一九五五年に発行され、タイ経済史研究のうえていわば古典的著作として評価をうけてきたものであるが、このほど最近二〇年間の「経済変動」を分析した二つの章(第一および第二章)を増補して新たに再刊されたものである。増補された第二章について簡単に紹介しておく、まず第一章では、この「経済変動」過程を国民所得統計の利用によって概括し、これを導入部として国民経済のうちで基本的な産業部門をなしている農業部

イングラム「タイの米価問題」(田坂)

門を中心に分析し、ついで第二三章では同じこの「変動」過程を財政・金融・貿易などの諸側面から観察している。本訳は、第一章のなかでも重要な位置をなす米価問題に関するものである。

(二) イングラムはここでライス・プレミアム論争を「三つの重要な問題——公正、配分効果と刺激効果、開発戦略」にそって紹介し、その是非について検討をくわえている。ただし、イングラム自身この問題について必ずしも一貫した立場をとっているとはいえない。なぜなら、プレミアム制度を、「公正」の点では農民に犠牲をおわせ労働生産性の発展を妨げるものだと否定的に評価しながらも、他方、「開発戦略」の点では「タイ経済の近代化に貢献する」と積極的に評価しているからである。プレミアム制度とは、基本的にはタイに

おける本源的蓄積機構だと訳者は考えている。したがって、この制度の是非をめぐって階級的立場が分かれるものと思われるが、イングラムの立場が本質的にはどこにあるのかは、読者の判断にゆだねることにしよう。ところで、このプレミアム論争を整理しながら、イングラムが最も力を注いでいる点は、タイにおける米価形成のメカニズムの分析であり、彼は近代経済学の部分均衡分析を用いてこれを果している。訳者の見解とは基本的に異なるが、一つの見方を代表するものとして興味深いものがある。

以上、この論文において基本的と思われる論点のありかを二点ほど紹介してみた。なお、この米価問題の分析においてイングラムがあげている諸事実を、第一にタイにおける農民層分解の論理と形態との関連で、また第二にタイにおける低賃金構造の分析との関連で見なおすとき、新たな光彩をおびてくると思われるが、しかしここでは単に示唆するだけにしておきたい。

(三) 訳出にあたって原文の斜字体の箇所は傍点をふって示した。また「」による挿入句は訳者の補足である。

*

*

一つの問題が二〇年間タイの農業政策論議を支配している——通常「ライス・プレミアム」といわれている米の輸出課税がすなわちこれである。われわれは第四章において、タイの農民は一九三〇年代には租税負担が軽かったことをみた。その時代までに、直接税の二つの歴史的諸形態——人頭税と地租——の双方とも廃止されていた。しかしわれわれは、複数为替相場制度と米穀輸出課税が第二次大戦後の時期にどのように米作農民に重い租税負担となったかについても検討した。一九五五年にこの複数为替相場制度それ自体は廃止され単一為替相場が採用された。同時期に、政府は「ライス・プレミアム」制度を設立したが、そのもとでは米穀輸出業者は輸出米の各トン当りにつき特別税を支払うことが要求された。プレミアム・レートは米の種々の等級と種類について固定化された。ライス・プレミアム(および輸出税)⁽¹⁾は輸出される米について支払わねばならないが国内的に販売・消費される米については支払う必要がないために、国内価格はプレミアムの大きさだけ世界価格と異なる傾向にある。

(1) 輸出税(それは白米の価額の四・二パーセントである)の経済的効果はまさしくライス・プレミアムのそれと同様である。この議論においてライス・プレミアムに言及するとき、

とくに指摘しない場合には、その両者をふくめている。

ライス・プレミアム・レートは時々変動したが、その基礎的制度は一九五五年から一九七〇年まで不変のままであった。この期間、ライス・プレミアムは政府内外で活発な、そして時々過熱した議論と論争の対象であった。それは、一般新聞や政府報告書や政治的討議において、またタイの経済学者によるいろいろな論文や論説において、そして多くの記事や書物において議論されてきている。タイにとってライス・プレミアム論争はその重要性和規模において一九世紀前半のイギリスの穀物法論争に比敵するといえることができる。⁽²⁾ リカードはまだ現われていないが、ライス・プレミアムは過去一世紀の他のどんな問題よりもタイの経済学者の著作を刺激している。⁽³⁾

(2) これら両ケースとも主要穀物に対する関税の調節装置ともなっていたが、もちろん穀物法はイギリス農民を保護し小麦の国内価格をそれが無い場合よりも高く維持することを意図した輸入関税であった。タイのライス・プレミアムは輸出関税およびタイ農民への課税である。それは米の国内価格をそれが無い場合よりも低くする原因となっている。両ケースとも所得分配にたいするその効果が論争の中心の問題である。

イングラム「タイの米価問題」(田坂)

(3) 重要な出版物を若干あげる。

Chaoyong Chuchart and Sopin Tongpan, *The Determination and Analysis of Policies to Support and Stabilize Agricultural Prices and Incomes of Thai Farmers* (Bangkok, 1965); Phairach Krisanamis, *Paddy Price Movements and Their Effect on the Economic Situation of Farmers in the Central Plain of Thailand* (Bangkok, 1967); M. C. Sithiporn Kridakara, *Some Aspects of Rice Farming in Siam* (Bangkok, 1970); Sura Sanittanon, *Thailand's Rice Export Tax: Its Effects on the Rice Economy* (Bangkok, 1967); T. H. Silcock (ed.), *Thailand: Social and Economic Studies in Development* (Canberra, 1967), esp. Chs. 9 and 10; T. H. Silcock, *The Economic Development of Thai Agriculture* (Canberra, 1970); D. Usher, "The Economics of the Rice Premium" (mimeo., Bangkok, 1965 ?); Edward Van Roy, "The Pursuit of Growth and Stability Through Taxation of Agricultural Exports: Thailand's Experience," *Public Finance*, XXIII, No. 3, 294-317; Melvin Wagner and Sopin Tongpan, "Structure of Thai Rice Prices" (mimeo., Bangkok, 1965)

ライス・プレミアムについての徹底的な分析と議論が明らかにしたことは、その問題はきわめて複雑なものであるという点、それはいくつかの異なった次元で議論されることができるといふこと、そして公正な社会政策、開発戦略などの

第1表 等級別ライス・プレミアム・レート⁽¹⁾
(トン当りパーツ)

日付 ⁽²⁾	白米			碎米	もち米
	100%	5%	15%	A1スーパー	(卸売)
1956年1月1日		935	935	470	600
1958年4月23日				590	
1959年6月18日				470	
1959年11月4日					840
1959年12月30日	890	890	840	450	800
1960年8月2日				540	
1960年12月30日				500	600
1961年4月17日				540	
1961年6月6日			890		
1962年4月3日	950	950	950	600	
1962年5月15日					800
1962年10月3日					700
1963年7月16日					800
1967年1月16日	1,010		940	680	
1967年3月	1,090	1,050	1,000	700	840
1967年4月	1,240	1,190	1,080	790	
1967年5月	1,300	1,230	1,130	810	
1967年6月	1,320	1,260	1,150		850
1967年7月	1,470	1,400	1,290	840	
1967年8月	1,640	1,570	1,460	930	860
1967年9月	1,520	1,450	1,350	890	850
1967年10—11月	1,640	1,570	1,460	930	980
1967年12月					850
1968年1月					840
1968年2月					900
1968年3月	2,070	1,970	1,890	1,270	1,470
1968年4—5月	1,960	1,810	1,670	1,090	1,420
1968年6—10月	1,830	1,680	1,540	960	1,530
1968年11月	1,450	1,450	1,300	800	1,250
1969年9月15日	1,100	1,100	1,100	500	
1969年12月3日	1,000	1,000	900		800

註) (1) ときとして奨励的な特殊なつけ値がつけられた。たとえば、1968年8月、2,000トン販売したとの輸出業者も、1,450パーツという公定レートのかわりに、わずか1,100パーツ(5%米)請求されただけであった。

(2) レートは日付と日付の間が不変であった。たとえば、100%米のプレミアムは、1956年1月1日から1959年12月30日までトン935パーツであった。ついで1962年4月3日まで890パーツであった。

出所) Bank of Thailand, *Monthly Report*; Bank of Thailand, *IMF Consultations*, 1968, 1969, 1970; Usher, *Economics of the Rice Premium*, p.2.

基本的諸問題が含まれているということ、これである。⁽⁴⁾ 論争がそんなに長びきかつ活発である一つの理由は、決定的で信頼性のある証拠が欠落しているために確かな手がかりが不明瞭であるということにあるといつてよいし、またそのほかは論理的証明のむずかしい価値や不可量物を含んでいることに

あるといつてよい。

(4) 二人の研究者は次のように打ちあけている。「この研究を始める以前、われわれはプレミアムはいいことだと考えていた。この研究が始まったときには、われわれは、それはたぶん全く廃止されるだろうと思つた。その問題についてまじめで多少とも継続的な研究をしたのち一年たつて、われわれは

もっと研究が必要であると非常に強く感じた」Wagner and Tongpan, op. cit., p. 2.

この問題について十分議論するには一冊の本を必要とするであろう。われわれはここでは、先に引用した著者達の労作を引きながら、主要な点の簡単な概括を試みるだけにしておく。

等級別の米に対するプレミアム・レートは第1表に示されている。民間輸出業者は輸出米トン当りこれらの額を支払わねばならない。⁽⁵⁾特定の等級についてプレミアム・レートは時々変更されたけれども、その平均的水準は一九五五—六六年の一二年間大きく変化しなかった。レートの変更はまれであった。一〇〇%「白米」のような重要ないくつかの等級の米については、トン当りプレミアムは一二年間に二倍に変化しただけであった。碎米(A1スーパー)のような他の等級については変更はもっとしばしばあったが、しかしライス・プレミアム・レートが世界米価の変動に対して反作用ないしは反応するために組織的に利用されたのではなかったことははっきりしている。⁽⁶⁾もち米のプレミアムのように特定のレートの変更の目的は、十分説明されていないが、しかし一つの目的は

イングラム「タイの米価問題」(田坂)

輸出货量と国内価格に影響を与えることである。たとえば、もち米についての強い輸出需要が国内使用のための在庫量を減少させはじめると、またそのために国内市場においてその価格を上昇させはじめると、輸出を規制し世界価格と国内価格との幅を広げるためにプレミアム・レートは引上げられることになるだろう。全体のレート構造は世界価格に対して敏感な反応(ないしは関連)を示していないけれども、特定の等級の米についてはプレミアムが輸出需要に反応して変動するといつてよい。

(5) いくらかの米は政府間契約のもとで輸出される。この場合、政府の販売価格はその購入価格をこえており、ためにライス・プレミアムに類似した利潤を生む。そのような利潤の率は商業輸出の場合のライス・プレミアム・レートより低くなると思われる。

(6) 一九五六—六三年の期間について、プレミアムの変更は輸出価格の変動に対比してごく小さかったが、平均的プレミアム・レートと平均的輸出価格とが同じ方向にわずかに動く傾向があったことを、ある研究が明らかにした。Chaityong Chuchart and Sopin Tongpan, op. cit., pp. 39-41を見よ。

一九六七—六九年の三年間はプレミアム・レートはそれに

一八七 (一八七)

第2表 米穀輸出とライス・プレミアム

年度	米 穀 輸 出			ライス・プレミアム			
	量 ⁽¹⁾ (1,000 トン)	額 ⁽²⁾ (100万 バーツ)	平均価 格 ⁽³⁾ (バーツ /トン)	全プレ ミアム ⁽⁴⁾ (100万 バーツ)	平均プ レミア ム ⁽⁵⁾ a (バーツ /トン)	プレミアムの比率 輸出額 ⁽⁶⁾ b (%)	全政府収 入 ⁽⁷⁾ c (%)
1950	1,418	1,672	1,179				
1951	1,474	1,824	1,237				
1952	1,549	2,629	1,697				
1953	1,359	3,747	2,757				
1954	1,001	3,087	3,084				
1955	1,236	3,133	2,535				
1956	1,265	2,861	2,262	842	666	29	17
1957	1,570	3,622	2,307	840	535	23	16
1958	1,133	2,968	2,620	812	717	27	15
1959	1,092	2,576	2,359	756	692	29	13
1960	1,203	2,570	2,136	745	619	29	11
1961	1,576	3,598	2,283	872	553	24	12
1962	1,271	3,240	2,534	753	592	23	9
1963	1,418	3,424	2,416	819	578	24	9
1964	1,896	4,389	2,315	1,238	653	28	12
1965	1,895	4,334	2,281	1,192	629	28	11
1966	1,507	4,001	2,650	995	660	25	8
1967	1,482	4,653	3,144	995	671	21	7
1968	1,068	3,775	3,534	1,268	1,187	34	8
1969	1,023	2,945	2,879	1,037	1,014	35	6

註) a : (4) ÷ (1), b : (4) ÷ (2), c : (4) ÷ 全政府収入

出所) Bank of Thailand, *Monthly Report*; Bank of Thailand, *IMF Consultations*, 1960, 1970; Department of Customs, *Annual Statement of Foreign Trade*.

先行する一二年にくらべてしばしば変更された。深刻な早魃が一九六七年に発生し、米穀が不足することが明らかとなった。同時に、世界米価が上昇しはじめた。政府は、国内米の

不足と国内米価の急騰の見通しについて警戒するようになった。一九六七年のはじめライス・プレミアムは従価でかけられ、輸出価格にリンクされた。たとえば「五%碎米入り白米」についてはプレミアムは従価三〇パーセントとなった。「公定」輸出価格はプレミアム計算のための基礎として各月ごとに決定された。(この計算の結果は一九六七年一月から一九六九年二月までの期間について第1表に示されている)。その従価率はのちに四〇パーセントとして六〇パーセントへと引上げられた。輸出割当も米の十分な国内供給を保障するために適用された。一九六八年の米輸出はわずか一、〇六八、〇〇〇トンであり、一九五四年以来最低の水準であった。

これらの強力な処置の結果として国内卸売米価は、最も激しく不足し

た時期に事実上引下げられた。以下、特定の等級の米について例示しておこう。

危機が去ったずつとのちに、一九六九年九月にプレミアム・レートは再び固定化された。一九六九年二月までにそれらはほぼ一九六六年の水準までに復帰した。

一九五五年以降ライス・プレミアムは輸出来の総価額のうち二五―三五パーセントにのぼっていた。各年数字は第2表に与えられている。しかし、これらの数字は商業輸出に対する課税規模を過少評価している。というのは、その数字は政府間契約の場合の利潤を含んでおり、それはしばしば民間輸出業者が支払うプレミアムより低いからである。それらはまた直接輸出関税を除外している。

(7) アッシャー「ライス・プレミアム」の経済学(前掲)は、民間輸出と政府間輸出についてのプレミアムを比較

イングラム「タイの米価問題」(田坂)

期 間	輸 出 量 (1,000ト)		ト ン 当 り レ ー ト (バ ッ ツ)	
	民間	政府間	民間	政府間
1959年10月—1960年9月	930	308	638	420
1960年10月—1961年9月	919	585	657	416
1961年10月—1962年9月	954	465	703	237
1962年10月—1963年9月	793	448	742	436
1963年10月—1964年9月	951	803	736	546

較した数字をいくつか示している。しかし、その二つの型の輸出の構成は等級ごとにはわからないから、これらの数字は、「両者の」比較プレミアム・レートを正しく示していないかもしれない。政府契約のもとの輸出は民間輸出よりもトン当り低いプレミアムでより安い等級を高比率含んでいる。アッシャーの数字は上のようである。

その数字について若干問題があるにもかかわらず、ライス・プレミアムは明らかに重い輸出課税であることを示している。その国の主要な農業生産物に対するそのような課税は——その耕作が大多数の人々の主要な職業である——必然的にその経済に重要な影響を与えた。

とりわけライス・プレミアムは租税収入の主要な財源である。全政府収入のうちその割合は一九五六年の一六・五%から一九六九年の五・七%に低下してきているのであるが(各年資料については第2表をみよ)。

ライス・プレミアムについての経済学的分析は、あるレベルで価格の連鎖——輸出価格、国内の卸売米価と小売米価、国内穀価格(卸売と農家庭先)——に対するその影響に焦点を定めている。大多数の経済学者は一致して、ライス・プレミアムは世界米価に対してほとんど影響を与えていないはずだ

(8)とみてゐる。彼らは、たとえタイが主要な米輸出国の一つであつても、その輸出は世界の総供給のうちのごく小さな部分に相当するだけだと主張している。したがつてタイは米について弾力性の高い世界需要曲線に直面し、かつ世界価格——どんな時でも総供給と総需要の状態によつて決定される——以上にその輸出価格を引上げるほどの力をもっていない。ライス・プレミアム・レートの変動は世界価格に対しては取るに足らぬ影響を与えるだけだろう。米価についての詳細な研究のほとんどは、タイの輸出価格が実際に世界価格のあとをまったく密接して追いかけていることを示している。その著者達は「タイの輸出米価は明らかに世界価格に縛られており、それゆえライス・プレミアムは輸出価格の安定化にとつてほとんど非効果的である」と結論した。(9)

(8) アッシュャー「ライス・プレミアムの経済学」は、プレミアムの廃止が——それが平均三〇%であるとき——世界価格を二・七%まで低下させるであろう、と見積つた。

(9) Chuchart and Tongpan, op. cit., p. 36 しかし、いろいろの著者達は、米が均質ではなく、また特定の種類についてのバイヤーの選好が前述の意見に対して一定の限定を要するものであると認めている。

この点は重要な点である。なぜなら、政府のスポークスマンが時々次のように主張しているからである。すなわち、ライス・プレミアムはその輸出価格をプレミアムがない場合の価格よりも高いものとしており、したがつてその租税負担は外国の消費者に課せられる、と。そのような寡占的な力は——タイ米について特別の選好をもっている市場地域での販売のように——一定の場合ある程度存在するかもしれないが、大多数の経済学者は先に到達した結論、すなわちライス・プレミアムは世界価格に対して取るに足らぬ影響をもつだけであるということをも認めている。ただし、統計的証拠が決定的ではなく、タイ輸出価格と世界価格との間の緊密な相関が、プレミアムの変動は世界価格に影響しないということを証明したことにはならないことに注意すべきである。

国内卸売米価は、ライス・プレミアムと輸出業者の費用補償マージンだけ減じた輸出価格に均衡化する傾向にある。たとえば、五%碎米入り白米がトン当り、三、〇〇〇バツで輸出市場に販売されるなら、またライス・プレミアムがトン当り一、一〇〇バツであるなら、そして輸出費用がトン当り五〇バツであるなら、商業輸出業者はバンコックの卸売

市場においてトン当り一、八五〇バーツ以上は支払わないであらう (3,000—1,100—55—1,850)。他方、彼は他の輸出業者との競争のために、トン当り一、八五〇バーツを大幅に下回ってこの米を購入することはできないであらう。この点は、簡単な点であり、米価の経験的研究によって一般的に支持されている。そしてそれは輸出価格と卸売価格との間の予期された関係を示している。(10)

(10) 資料上の不備のために、しかしまた、輸出業者の費用を増加させるところの割当・許可資格・行政手続きのような米穀輸出に関する別の障害や制限のために、〔輸出価格と卸売価格との関連に〕 組替が発生することがある。米穀輸出を規制するために近年このような目に見えない障害を操ることが増えている。

市場的連鎖の次の環では、籾の卸売価格はバンコックでの卸売米価マイナス相対的に一定の包装費——それは精米料・輸送費・仲介業者マージンを含む——に均衡化する傾向にある。この環を資料的に明らかにすることはさらに困難である。というのは、籾価格が異なった諸地域では地方的な需給バランスが変わるにつれて変化するからであり、また輸送費や仲介業者マージンを明らかにすることが困難なためである。し

イングラム「タイの米価問題」(田坂)

かし、市場構造の諸研究によると、それは高度に競争的であるという結論に到達している。確かに寡占のおよび独占的な力が存在している。だが、精米業者・貿易業者・そしてその他の仲介業者の相対的に大きな数、プラスこれらの職業に参入する自由は、市場マージンが使用サーヴィスの費用に接近するだろうということを暗示している。(11)

(11) Sura Sanittanont, op. cit., p. 66 に引用されている Dr. Udhis Narkswasti による研究 "Farmer's Indebtedness and Paddy Marketing in Central Thailand (Bangkok, 1958)" したがうと、農民は米の国内小売り価額の約七十二パーセントを受取る。その後の研究では、アッシャーは、米の交易がきわめて競争的であると断定した。彼は、籾の庭先価格が小売米価の七九パーセントであったと概算した。D. Usher, "The Thai Rice Trade", in Silcock (ed), Thailand, op. cit., を参よ。これらは、小売価格のうちたゞこの国において農民が受けとるよりもかなり高い比率である。

したがってわれわれは次の等式をえる。(12)

庭先籾価格 = 籾田米価 - (ランダム・ノイズ) + 輸出業者

マージン (精米料 + 輸送費 + 仲介業者マージン)

もし輸出価格が世界市場において確定され、そしていくつかの市場費用が競争的に決定されると仮定するなら、ライス・

プレミアムの変動が恐らくある遅れを伴いながらも直接的に
 籾価格に伝導されるという結果になる。特に、もしプレミアム
 が廃止されるなら、籾価格は急騰することになるだろう。
 アッシャーは、それが約八五パーセント騰貴するだろうと計
 算した。⁽¹³⁾

(12) 籾の一トンは米の約〇・六六トンにあたる。それゆえ、こ
 の等式において「籾価格」とは一トンの米を産出するのに必
 要な重量、すなわち約一・五一トンを意味する。

(13) Usher, in Siroock, ed., *Thailand*, op. cit., p. 7. ア
 ヷシャーはこの計算において世界価格の三三パーセントの低下を
 考慮に入れた。

この分析はもちろん、ライス・プレミアムの負担が主とし
 て米作農民によって担われていることを示唆している。政府
 はこの結論を否定して、ライス・プレミアムの廃止は仲介業
 者の利潤をたんに増加させるだけだろうと主張している。こ
 の主張を信用することはむずかしい。先に述べたように、米
 の交易についてのすべての研究は、活発な競争がこれらの諸
 活動において存在していることを示している。

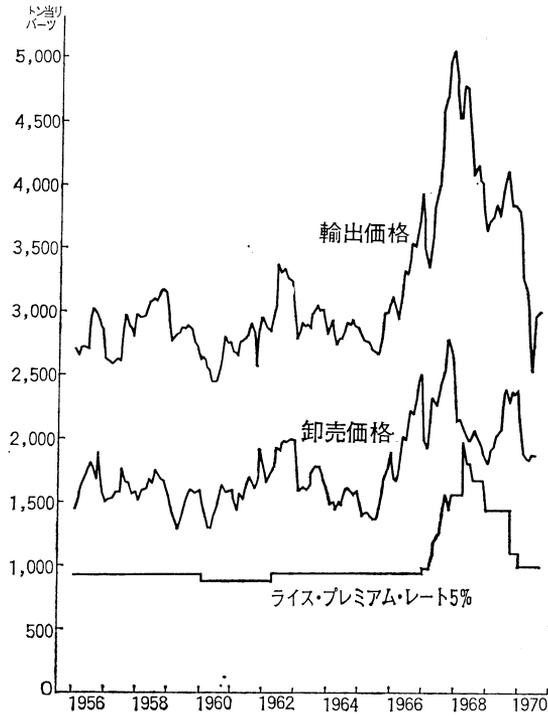
別の証拠を引用することもできる。先の方程式において、
 ライス・プレミアムが不変のまま輸出価格が自然的に騰貴

することは、輸出価格が不変のままライス・プレミアムが
 等しく低落するのと同様の効果を方程式の右辺に与えること
 がわかる。もし政府の主張が妥当なものであるなら、輸出価
 格の騰貴は籾価格にはほとんどあるいは全く影響を与えないで
 であろう。(たぶん購買独占的な仲介業者は、ライス・プレミアムの
 低落から発生する利潤の増大に熱心につけ込むのと同様に、輸出価
 格の騰貴から発生するそれにも熱心となるだろう。) この仮説はテ
 ストされうる。なぜならプレミアム・レートはむしろまれに
 しか変更されなかったが世界価格は絶えず変化しているから
 である。輸出価格と籾価格の分析によれば、その二つの系列
 は確かに相関しており、そして輸出価格の上昇(下降)に籾
 価格の上昇(下降)がすばやく続いている。この結果は政府
 の主張にもとづく仮説と対立している。⁽¹⁴⁾

(14) シティボン・クリダカラ(前掲論文)は先にまとめた論理
 的な議論を強く主張し、その矛盾を説明するために何人かの
 政府高官に挑戦した。私の知るところでは、彼らのうちだれ
 一人としてこの特定の点についてまだ反論していない。

過去一五年間のこれらの価格の関連を説明するためには一
 つの特定の等級の米についてその経歴を検討することが有益
 であろう。第1図は、5%碎入り白米について適当な価格系
 である。⁽¹⁵⁾

第1図 5%碎米入り白米；輸出価格、卸売価格、プレミアム・レートの月平均



出所) 本書第六章第 XXIV 表をみよ。

なり変動したとしてもライス・プレミアムは一九五六年から一九六六年までほとんど不変のままであったということを窺うことができる。ライス・プレミアムが不変であった間、輸出価格の変動がそのまま国内卸売価格に伝導された。事実、不変的なライス・プレミアムの存在が、輸出価格の変動の割合以上に国内価格の変動をひきおこした。

籾価格は順次に国内卸売米価のあとをびったりと追いつき、それゆえ世界価格の変動にも対応した。一九六五年から一九七〇年までの期間、輸出

列を含んでいる。

(15) この術語は約五パーセントの碎米のまざった精米された白米を意味する。輸出価格とは関税とプレミアムを含んだバンコック本船渡しである。卸売価格とはバンコック向けのものである。

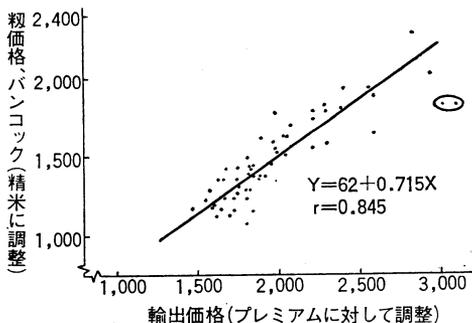
第1図においてわれわれは、たとえ輸出価格がこの期間か

イングラム「タイの米価問題」(田坂)

価格(プレミアムに対して調整された)と籾価格との簡単な相関係数は〇・八五であった。分布図については第2図をみよ。

世界米価が一九六六年に騰貴しはじめると、国内価格は直ちに続いた。米の国内供給を保護し、国内価格の騰貴を規制するために、輸出割当が一九六六年後半に課せられた。その

第2図 No.2の粳（卸売価格）と5%碎米入り白米（輸出価格）の相関



註) 1956—70年の2月、5月、8月、11月について月平均。円でくくった1967年11月と1968年2月の二つの点は、割当と非価格規制のために、通常の型からはずれており、したがって回帰計算から除外した。

出所) 粳価格；1956—59, Department of Internal Trade; 1960—69, Bank of Thailand, *Monthly Report*. 輸出価格；1956—63, Chuchart and Tongpan, *The Determination and Analysis of Policies to Support and Stabilize Agricultural Prices and Incomes of Thai Farmers* (Bangkok, May 1965); 1964—70, Board of Trade.

年九月にトン当り二、八二〇バツツ（月平均）のピークに達した（第1図をみよ）。ライス・プレミアムはこの危機の間しばしば変更され、一九六八年三月にはトン当り一、九七〇バツツの高値に達して、⁽¹⁶⁾ 割当がまた採用された。これらの処置は米と粳の国内価格を低下させた。すなわちそれらは一九六七年の最後の四半期に急激に低落し、最も激しい米不足の期間に一九六八年の間じゅう低下しつづけた。一九六八年の米穀輸出はわずか一、〇六八、〇〇〇トンであって、一九六七年の三分の一に低下した。

価格騰貴が一九六七年にも続いたとき、ライス・プレミアム・レートは急激に上げられた——5%米では一九六七年のトン当り九五〇バツツからその年の終りまでにトン当り一、五七〇バツツへ。輸出割当はさらに継承された。

一九六七年の第3四半期までに、タイ全土にわたる深刻な早魃が稲作にひどい被害を与えるだろうということが明白となった。価格は暴騰した。5%米の国内卸売価格は一九六七

(16) 実際には、一九六七年一月にライス・プレミアムは従量税から従価税に変えられた。しかし、とくに従価率が適用された政府輸出価格は各月ごとに設定された。ピークでは、その率は一、〇〇〇バツツの控除をもって従価六〇パーセントであった。

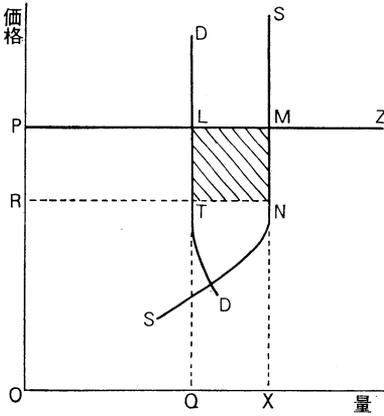
一九六八年の作物は豊作であったが、一九六九年後半までライス・プレミアム・レートは危機以前の水準までに回復されなかった。

このエピソードは米の国内供給を安定化するための政府決定を非常によく物語っている（ついでにいえば、これはタイの歴

史に深く根づいている政策である。一七世紀から一九世紀まで王は国内のストックが低下するときはいつでも米の輸出を禁止することができたし、また禁止した。そのエピソードはまた、たとえライス・プレミアムが一九五六年から一九六六年まで安定化の目的のために全く利用されなかったとしてもライス・プレミアムは国内価格の安定化のための装置として利用されることができるといふことを示している。

ライス・プレミアムからの政府収入が一九六七年から一九六八年までに輸出量の急激な低下にもかかわらず増大したと

第3図 ライス・プレミアム，非弾力的国内需給



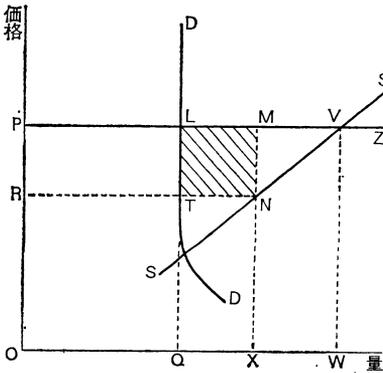
イングラム「タイの米価問題」(田坂)

いうことは興味深い。

以上の点までの議論は第3図の助けをかりて簡単に総括することができる。⁽¹⁷⁾ タイ米の輸出にたいする世界需要曲線(PZ)は一般的世界価格(OP)に完全に弾力的であると仮定する。

国内の需要曲線(DD)と供給曲線(SS)は両者とも適当な価格範囲内では完全に非弾力的である。これらの仮定のもとで、米のOQは国内で消費され、QXは輸出される。政府は輸出されるトン当りそれぞれにつき平均的ライス・プレミアムPRを徴収し、したがってLMNTにのぼる租税収入を生む(第3図の

第4図 ライス・プレミアム，弾力的国内供給



一九五 (一九五)

斜線部分)。国内消費者は国内価格(OR)——それは世界価格マイナスライス・プレミアム、あるいはPLTRにのぼる全利得と等しい——で米の需要を満足することができるので彼らは利益を得る。

(17) ライス・プレミアムの効果についての優れた図式的分析に
 つづけば、Sura Santitanont, op. cit., Ch 1を見よ。

第3図に作図されるように、たとえライス・プレミアムが廃止されても、世界価格も輸出量も不変のままであろう。主要な論争点は、世界価格で評価された米産出量と国内価格で評価された米産出量との間の開差の二つの構成部分——すなわちPLTRとLMNTの配分に関連している。政府は、両構成部分が購買独占的な仲介業者によって着服され、農民の収入は不変のままであると主張している。大多数の経済学者は、仲介業者のサーヴィス価格が競争的に決定され、両構成部分は実質的には不変のままであろうと確信している。したがってプレミアムの廃止は米作農民の収入をPMNRだけ上昇させるであろう。すなわちその開差の両構成要素が米作農民のもとに生じることになるだろう。

第3図において輸出供給は適当な範囲内では完全に非弾力

的である。しかし、穀価格が騰貴すればするだけ産出量の増大を刺戟すると考えられる。その場合、その事態は第4図に描かれたようになるだろう。最初に、世界価格OPでは、ライス・プレミアムPRが課せられ、米穀のQXが輸出される結果、OQが国内的に消費される。租税収入は以前と同様LMNTである。しかし今やライス・プレミアムが廃止され国内価格がORからOPに上昇すると、全産出量はOWに増加し、輸出量はQXからQWに上昇する。農民が既存産出量についてより高い世界価格を受取るばかりでなく、また全産出量が増加するために、農家所得が上昇する。⁽¹⁸⁾

(18) これはもちろん部分均衡分析であり、他の作物の産出量にたいする影響、租税収入の代替、他の諸部門にたいする影響、そしてその他の複雑な問題については考慮に入れていない。

前述の部分均衡分析はいくつかの洞察を与えている。だが、ライス・プレミアム論争に含まれた多くの論争点を取扱うことは適當ではない。ライス・プレミアムが国内米価をそれがない場合の米価よりも下方に押し下げることについては、あらゆる人が一致して認めるところと思われる。⁽¹⁹⁾それは、都市的地域の生活費を低下させ、こうしてより高い賃金(および

公務員にとつてはより高い給与)へと圧力をかけることを妨げるがゆえに、この価格効果は望ましいというのが政府の見解である。低い貨幣賃金は輸出を促進し、幼稚産業部門が輸入品と競争することを可能にさせる。もし国内米価が急騰するようになれば、非農業労働者の実質所得は低下するのである(米が主要な食糧であるから)、賃金と給与の増大について圧力がかかるであろう。政府支出は上昇し、喪失したライス・プレミアム収入を代替するだけでなく支出の増加をカバーするために新租税収入が見出されなければならないだろう。製造業(およびサーヴィス部門)の価格が上昇して農業部門と非農業部門との実質交易条件を元どおりにしてしまつたために、またいくつかの新しい租税が米作農民にかけられるために、米作農民は彼らの実質所得の上昇にありつけないということが十分ありえる、と論議は続いている。

(19) 政府スポークスマンは、プレミアムが世界価格を上昇させ、かつ外国購入者によつて負担されるという彼らの主張とそれがたとえ矛盾しているとしてもこの点を受入れている。

この次元では議論はきわめて複雑となる。というのは、現在の状況に比較されるどのような状況も存在しないからである。他の諸部門・人口の他の諸部分・政府の収支・国際収支

イングラム「タイの米価問題」(田坂)

・労働誘因、等々に対するライス・プレミアムの変更の影響についての考察は、多くの付加的諸変数を導入する。これらの諸変数のすべての相互作用について、またすべての可能な結合について検討することは紙幅が許さない。したがって、われわれはその論争における主要な論点を簡単に総括することにしよう。

ライス・プレミアムの反対者は、それが人口の大部分に対する重い租税負担から成っており、とにかく人口の大多数は相対的に低所得であると主張している。この租税負担は過重で不公平であるばかりでなく、生産的努力を阻害し農業技術の改良を妨げる。ライス・プレミアムは農民が受けとる粗価格を低下させるために、産出量拡大の動機はいっそう弱まる。したがって、農民はそれがない場合耕作するであろう土地までも耕作しないだろうし、熱心には耕作しないであろう。また肥料を使用しないだろうし、そして新品種を採用するのに熱心ではないだろう、とくにそれが伝統的な品種よりも費用がかかり危険が大きいならば。これらのすべての理由のために、⁽²⁰⁾ライス・プレミアムは籾の産出量を低下させる傾向にある。

(20) J・パーマンは、供給反応についての彼の徹底的な研究において、価格に対する重要な反応がタイにおいては存在しており、またプレミアムの減少は米の市場供給の増大をもたらすであろうと結論した (*Supply Response in Underdeveloped Agriculture*, Amsterdam, 1968, pp. 314, 336-37)。

肥料の使用に対する否定的な影響は特別な注意をひく。伝統的に、タイの米作農民は肥料を使用したことがないが、生産量に対する化学的肥料の効果は近年宣伝されており、その有利さは明白であると思われる。だが、籾価格に比較して肥料価格は、ライス・プレミアムのためにタイにおいては人為的に高い。その適切な比較は籾価格に対する肥料価格の比率である。パーマンは、タイ——ここでは窒素一キログラムは籾六・七〇キログラムの価額に相当する——と日本——ここでは窒素一キログラムはわずか籾一・四四キログラムの価額に相当する——との間の比較を引用している。⁽²¹⁾これらの数字は、タイの農民が彼の田圃に投入する肥料の購入をひかえる場合、彼は合理的に行動しているのだということを示唆する。追加的産出量の価額はその肥料の費用をほとんど補償せず、彼の投資と労働に対する収穫をもたらさないだろう。

(21) Behrman, op. cit., p. 88

この点が現在タイにおいて特別の意義をもっているというのは、稲作栽培にとって最適な土地のほとんどは、すでに耕作されており、産出量の将来の増加は主としてライ当り生産量の増加に依存しているからである。さらに、いくつかの証拠が示唆していることは、農業労働力が少なくとも季節的には不完全就業にあり、そして生産量の増加に寄与する諸活動にその不完全就業労働力を——もし農民と彼の家族にとって経済的に魅力的であるならば——利用する機会が恐らく存在するということである。⁽²²⁾

(22) この点は論争中である。何人かの経済学者は、作付けと刈入れのピークには余剰労働力は存在しないと主張している。たとえ彼らが正しいとしても、農業部門では、これらのピークの季節における労働要求を減少させるために季節外労働を利用することが可能であろうし、こうして産出量の増加を達成することが可能であろう。二期作、資本整備建設のための労働利用、労働節約的装備(ポンプ、ミニトラクター)への投資、肥料の使用増大など明白な可能性がある。

さらに反対者は、ライス・プレミアムが輸出の成長を妨げ、また輸出市場が順調であった時期においても、タイが米の相対的有利さを十分に活用することを妨害し、ために貿易の利益が減少して経常勘定における不利な貿易収支をもたらした

と主張している。農業人口に対するその非刺激的効果は、実質的産出量の増加の可能性を国民から奪いとっている。人口の最も多い部門から実質所得の実質的増大を奪うことによつて、ライス・プレミアムは国内の非農業的産業——それは大きな国内市場の繁栄を必要とする——の発展を妨害している。

ライス・プレミアム(23)の支持者はこれらのいくつかの主張に反論している。何人かの支持者は、プレミアムは国内価格を低下させるのではなく世界価格を上昇させるのであつて、したがつて租税負担は外国の購入者にかかるのであると主張している。すでに見たように、この主張をまじめに受取る人は少ない。次の次元では、国内価格に対するプレミアムの効果は認めるが、しかしプレミアムの低下は米作農民に利益をもたらさないのである——なぜなら精米業者や仲介業者が自身自身のために全利益を着服するからである——と主張している。政府のスポークスマンはこれらの主張を立証するどんな証拠も提出していない。そして我々がすでに見たように、市場メカニズムについてのすべての研究は他の方向を示唆している(24)。世界銀行の使節団は、この問題についての簡単なコメントにおいて政府の見解に支持を与えた。「その課税が国内で

の米価を低下させる傾向にある」ことを認めながらも、報告書は「その課税は深刻な非刺激的役割を演じていず、またもしそれが除去ないし縮小させられても農民にはほとんど利益が生じないように見うけられる」と述べている(25)。どんな証拠も引用されておらず、また何がこの主張の根拠となつていいのか疑問である。

(23) ライス・プレミアムについての、こうした主張の体系的叙述はほとんどない。その問題を研究したほとんどすべての経済学者は結局反対者となつた。その問題を決定する政府高官は学問的な論文を發表していない。しかし、二、三の官僚は声明を出したり、手紙や短い論文を書いた。これらのいくつかは、M. C. Sihinorn Kridakara, op. cit., において利用できるが、多くの主張はいわば非難をうけるにちがいない。

(24) しかし、プレミアムの縮小が發表される場合、米と粃のストックを保有している仲介業者がそれらのストックについて思いがけない利潤を手に入れるのは事実である。この思いがけない利得は、刈入れ直前にプレミアムの縮小が發表されるなら、最低となるだろう。

(25) *A Public Development Program for Thailand* (IBRD, Baltimore, Md., 1959) pp. 68-69

関連した主張に、ライス・プレミアムは米と粃の国内価格の安定化に役立つというのがある。世界価格の変動から国内

経済を保護するために様々な輸出関税をある限度内で利用することができるといふのは事実であるが、ライス・プレミアムはこの方法で運営されていないというのが事実である。レートはまれにしか変動せず、国内価格は世界価格に密接に対応して変動する。（一九六七―一九九年のエピソードはこのすぐ前の叙述にとってももちろん例外である。）政府はこの関連を認めて、粃の庭先価格を設定することによって、またその段階で政府購入によりそれを支持することによって農家所得を安定化させる意向であると述べている。そうした計画が始められたが、その実効的な効果は小さいものであった。政府にカネも大量な粃の貯蔵設備も欠けており、ためにその計画は主として紙の上存在している。ライス・プレミアムが不変的に維持されているとき、一九五五年から一九七〇年までの期間のほとんどがそうであったように、それは農家庭先価格ないし農家所得を安定化させるものでももちろんなかった。世界価格の変動が直接的に農民に伝導された。

様々な錯綜した影響や農業資源の選択的利用について重点がおかれているので、より深い次元では議論はもっと複雑となる。明確な説明がすべての場合について存在しているわけ

ではないが、われわれは簡単な概括を与えることにしよう。タイの農民は米に特化しており、米作は単なる職業ではなく生活様式である。タイは、部分的には単一作物に対する極端な依存の危険を回避するために、しかもまた経済成長のための様々な原材料を用意するために、多角的農業を發展させることが今や必要である。国内米価を引下げることによって、プレミアムは他の作物の相対的魅力を増大し、こうして多角的農業を促進する。何人かの支持者も、米の供給が非弾力的であり、それゆえプレミアムは米の産出量を低下させないと主張している。（その主張は非弾力的供給を文化的要因あるいは追加的米作適地の不足のせいにしてしている。）この点は、農民がより高い米価には反応せず、他の作物の価格誘因に反応するだろう、という仮定を必要としている。ライス・プレミアムの収入が農業部門とくに米作農民に、灌漑・輸送設備・農業拡張的諸活動への投資という形態で還元されつつあるということが、そのかわりに主張されるかもしれない。これらの投資は生産性を増大させるであろう。それゆえ価格上昇よりもっと効果的であろう、と主張されている。結局、産出量に対する抑制的効果はこれらの社会資本によって相殺されている。⁽²⁶⁾

(26) 他との関連で、T・H・シロコック教授は「タイのライス

・プレミアムは……二〇世紀を通じてのタイ米輸送機関の改善の結果生まれた利潤のほとんどを……国庫にとつて……ほんの二〇に成功したものととして部分的には説明される」と述べた。*Economic Development of Thai Agriculture*, op. cit., p. 5.

低い国内米価は農業の多角化を促進するばかりでなく非農業的産業をも刺激する。米は主要な食糧であり生活水準の重要な構成要素であるから、低米価は企業により低い貨幣賃金の支払いを可能にし、こうして輸入商品との競争を可能にする。低賃金はまた外国資本の流入を促進する。ライス・プレミアムは、輸入代替と新しい輸出の成長を刺激し、こうしてタイ経済の近代化に貢献する。

かくして問題は開発戦略の問題となり、ライス・プレミアムに近代化の手段の役割があてがわれる。伝統的農業部門における貯蓄を強化しそれを非農業的（近代的）部門に転化することが必要であるとする経済開発理論にとって「プレミアムは」環にさえなるかもしれない。米の供給が非弾力的であり余剰労働が農業部門に存在していると仮定するなら、レウイスの有名な論文⁽²⁷⁾から引出された二重経済モデルを適用でき

イングラム「タイの米価問題」（田坂）

るだろうし、ライス・プレミアムが経済発展を促進すると結論することができる。

(27) W. A. Lewis, "Economic Development with Unlimited Supplies of Labour," *Manchester School*, May 1954

関連した論点、すなわち恐らく政府上層部に重要視されている点は、低米価が官庁労働者の給与水準を低米価でない場合のそれよりも低くすることを可能にしているということである。プレミアムがなければ生活費が上昇し、公務員給与を増大しなければならぬであろう、そして政府支出はそれにつれて増大するであろう。租税収入は上昇しなければならぬであろう。政府にとつて最も重要な政治的支持者は公務員であり、彼らの福祉が政策設定において主要なものであるといわれている。他方、ライス・プレミアムは価格安定化装置としては利用されていない。——一九六七年の不作につづく緊急の場合は例外である。世界価格の変動は、プレミアム・レートが不変的に維持されているので、直接的に米と粳の国内価格に伝導されている。たとえば、一九六五年から一九六七年まで国内米価は約五六パーセント上昇した。同じ時期に、パシフィック・コロンブリーの消費者物価指数は八パーセント上昇

し、この指数を構成する食糧は一四パーセントだけ上昇した。このことは、生活費に対する米価上昇の効果についての概算が高すぎることを意味している。

ときとして、「プレミアム」の支持者ですら、米作農民がライス・プレミアム(28)の低下から利益をえることはないだろう——なぜなら米作農民は別の方法でより高い租税を支払わねばならないだろうし、彼らが購入する商品の価格が上昇するだろうから——と主張している。要するに、米作農民と経済他の部分との間の実質的交易条件はプレミアム(28)の低下によって改善されないだろうといわれている。

(28) M・C・シテイボン・クリダカラは彼の翻訳において(前掲書、一四八—四九頁)、外国貿易局長であるナム・プムワトツ氏によって「驚くべき」主張——「プレミアムは米作農民にとって大きな利益である、というのほもしそれが廃止されるなら、政府はその収入欠損を他の分野での課税によって償わなければならないからである。……農民は人口の八〇分を形成するのであるから彼らはこの増大した課税の負担を支えねばならないだろう。したがってプレミアムはこれらのより高い課税から農民を解放するものであるから、プレミアムは事実上その廃止よりもむしろ農民にとって利益となる」——がなされたとしている。

実際の結果は新しい租税の選択にかかっているよう。この議論は少なくとも公正問題に鋭い焦点をあてる意味をもっており、それは全論争の中心的役割を演じている。ライス・プレミアム(29)の反対者は、米作農民が現在不均衡な租税負担を負っていると確信している。アッシュャーは、米作農民が、非農業部門の約一〇パーセントと比較すると、彼の収入の二二パーセントを租税に支払っていると算定した。⁽²⁹⁾ 農業所得は非農業所得よりずっと低いのであるから、租税体系はきわめて逆行している。公正の立場に立って、タイの農民が都市の非農業人口のより高い生活水準に補助金を与えていると主張することはむずかしい。しかしながら、たとえ政治的現実が農民にそのように要請するとしても、租税形態——ライス・プレミアム(29)ほどには活動意欲を弱めず、産出量を低下させず、また資源配分を歪めないような租税形態、が選択できるはずである。

(29) Usher, "The Economic of the Rice Premium," op. cit., p. 14.

われわれはここで、ライス・プレミアム(29)の負担が大部分の米作農民において、そして中央平原の農民において最も重いと思われることに注目してよい。米を栽培しない農民、ある

いは自給のみにそれを栽培する農民はプレミアムによる損害を受けていない。実際、彼らはそれから利益をうけているのである。というのはプレミアムが彼らの購入する商品の価格を低下させているからである。中央平原には平均的規模の農家が広汎に存在し、余剰米の大部分がそこで生産されているため、主要な負担はその地域の米作農民によって担われている。この点は興味深い、なぜならバンコック政府は中央平原に基本的に関心をもち、この地域は優遇されていると長いこと言われてきたからである。恐らく政府は、そのライス・プレミアム政策がこの地域の米作農民に特別に重い負担を課しているということに認識していない。ともかく、灌漑やその他の公共事業が中央部に集中しているのであるから、おおよかな社会的公正は、少なくとも農業部門のうちでは、達成されているといつてよい。

タイの経済学者によって報告された見解のうち有力な見解は、論争における三つの重要な問題——公正、配分効果と刺激効果、開発戦略——のすべてについてライス・プレミアムと対立しているが、プレミアム・レートは、一九六四—六七年の出版ラッシュ（タイの経済学者によるプレミアムに関する

出版物の相続々発行のこと。註(3)をみよ)ののち、一九六八年に新しいピークに到達した。

今やライス・プレミアムは経済的および社会的諸力によって徹廃されることがありうる。国内産出量の緩慢な上昇と人口の急激な上昇との結合が、タイの輸出できる余剰米を減少させる傾向にあるといつてよい。同時に、他の諸国における生産性の増大が米の輸入に対する世界需要を低下させているといつてよい。タイ米の輸出価格の低下はプレミアムの縮小を強めるであろう。タイ農民がその価格以下では市場向けに粳を生産しないという、ある粳価格が存在する。プレミアムがゼロとなる時、外国価格と国内価格は一致し、そしてその時政府は米穀輸出に補助金を与える方法を工夫しなければならぬかもしれない。もしその時が来れば、ライス・プレミアムの反対者は疑いもなくであろう、「私が諸君にいったとおりである」と。一方、支持者は農業の多角化を効果的に促進したことに祝杯をあげるであろう。